

権力闘争、階級闘争と階級利益

--ひとつの反正義論--

大西 広(慶應義塾大学)

昨年春、中国で生じた薄熙来失脚事件は表記タイトルを理論的に考える上で重要なヒントを与えてくれた。この事件をマスコミは「権力闘争」として面白おかしく報道したが、階級闘争はその一部分として権力闘争を含む。ので、これが権力闘争であったことを理由に階級闘争でなかったというわけにはいかない。薄熙来の行動は、確かに政治局入りという自己利益を目的としたものであったが、その目的のために農民を主とする貧者の利益を守ろうとした。ので、闘われていたのは彼らの利益を守るのか、富者の利益を守るのかであって、これぞ階級闘争である。薄熙来の真の目的は自己利益であったとしても、現にある階級闘争の場に自らを置き、その一方の階級の利益を守ることの自身の目的を達成しようとした。よくよく考えると、政治家(知識人もしかり)はそれ自身で「階級」ではない。どれかの階級の利益代表になるだけの存在であって、諸階級はそのことを知ったうえで、自らの利益をどう彼らに代弁させるかに努力する。つまり、ここでの真の闘いは階級闘争であって、それら諸階級の利益を代弁するもろもろの政治家が権力闘争をしたということになる。

「階級利益」や「階級闘争」については、現在の TPP をめぐる闘いも極めて示唆的である。なぜなら、今や日本の農民は自らの階級利益に目覚め、階級闘争に立ち上がっているからである。これは典型的な階級闘争であり、こうした闘いに労働者階級も続くことが期待されている。この農民の闘いを見るとき、「階級闘争」「階級利益」という言葉が死語扱いされるべきでないことを思い知らされる。

したがって、諸階級はそのそれぞれの「利益」のために闘っているのであって、「正義(justice)」はそのイデオロギー部面における「正当化(justification)」のためのものでしかない。「利益」、特に「階級利益」というものを基軸に社会にうずまく人間間の諸関係を改めて見直すことが求められている。

